

2 研究の実際

(1) 本研究における「気付きの質の高まり」についての考え方

「気付きの質の高まり」について小学校学習指導要領解説生活編には、「気付きは、活動を繰り返したり対象とのかかわりが深まったりすることに伴い、無自覚なものから自覚された気付きへ、一つ一つの気付きから関連付けられた気付きへと質的に高まっていくことが大切である。」⁽¹⁾と示されています。また、野田(2008)は、気付きの質の高まりを、①体験の中での直感的な気付きから「なるほど」「分かった」という実感、納得を伴う気付きへ、②1つ1つの個別的な気付きから話し合い交流の中で関連付けられた気付きへ、③対象への気付きから自分自身への気付きへと高まると述べています。

これらの理論を基に、本研究では「気付きのレベル」を無自覚なものを含めて5段階で捉えました。各レベルで表出される児童の言葉の例を加え、**図1**のように整理しました。気付きのレベルが上がるにはきっかけが存在すると考えます。本研究では、具体的な活動や体験を行う場面における気付きのレベルが上がるきっかけを考えました。例えば、対象との出会いや関わりで感情の表出が起こればレベル1へ、対象と繰り返し関わることでレベル2へ、自他を比べ合う友達との交流によりレベル3へ、活動を振り返り表現することなどで満足感を表出しレベル4へなどしました。なお、きっかけは複合的に作用するので、気付きの質の高まりは、必ずしも1段階ずつ上がるとは限らず、レベル0から2へ、レベル1から3へ等も想定されるため柔軟に捉えることとします。



図1 気付きの段階図

(1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説生活編』 平成20年8月 日本文教出版 P. 11

(2) 本研究における「児童が互いに気付きの質を高め合う」についての考え方及び手立てとその工夫**ア 「児童が互いに気付きの質を高め合う」についての考え方**

小学校学習指導要領解説生活編には、児童がよさを発揮し互いのよさやそれぞれの気付きを共鳴させることについて「互いにかかわり合う状況に身を置けば、今まで見えなかった他の児童との共通点や相違点、児童自身のよさが見えてくる。」⁽²⁾と記されています。児童が「互いにかかわり合う」ことが「児童が互いに気付きの質を高め合う」ことのきっかけとなると考えます。「かかわり合う」ことに手立てを講ずることで「互いに気付きの質を高め合う」ようになると捉えます。本研究では、その互いに関わり合う状況を具体的な活動や体験の場面で仕組むことにします。友達と関わり合いながら活動することで、児童は、互いの言動を自ずと比べ合い、ヒントを得たり認め合ったりして気付きを生み、その質を高めることができると考えます。また、野田（1998）は、「関心・意欲の高まりが気付きを生み、気付きの深まりで、さらに関心・意欲を高めていく」⁽³⁾と述べています。気付きの質の高まりは、児童の関心・意欲を高め、気付きの交流を更に活性化させると考えます。もちろん児童の気付きの交流は、教師の見取りと働きかけで促されることは言うまでもなく、教師による気付きの交流を促す働きかけが重要であることも付け加えておきます。

このように本研究では、友達と関わり合いながら活動し、児童が気付きの質を高めることを「児童が互いに気付きの質を高め合う」と捉え、そのための手立ての工夫を考えていきます。

(2) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説生活科編』 平成20年 8月 p.66

(3) 野田敬 『生活科の授業における『関心・意欲』と『気付き』との関連についての実証的研究』 1998
日本生活科・総合的学習教育学会 せいかつ&そうごう第5号 P.80

イ 「児童が互いに気付きの質を高め合う」ための**手立てとその工夫****・学習環境である場の設定**

「感情の表出」、対象への「繰り返しの関わり」、「自他の比較」を生む友達との交流を促す。

・気付きの可視化

「自他の比較」を生む友達との交流を促す。また、「感情の表出」や「満足感の表出」につながる。

・教師の働きかけ

「繰り返しの関わり」、「自他の比較」を生む友達との交流を支える。また、「感情の表出」、「満足感の表出」を生む。

※ 「 」は前頁図 1 に示した気付きの質を高めるきっかけを表します。